感じることと動くこと

独立研究者 森田真生（もりた まさお）

Essay 時の調べ

わが家にはいま、9歳と5歳の息子たちがいる。二人の様子を見ていると、兄を追いかけ、いつも兄を手本として学んでいる次男は、文字の読み書きや計算、スポーツなど、何につけても身につくのが早いと感じる。

近くにいつも、自分より少し先を行く手本があるおかげなのだろう。文字が書けるようになる前から自分でも文字を書けるような「感じ(feeling)」を知っているし、まだ幼い頃から、兄と同じように、遠くまでサッカーボールを蹴る感覚を味わっている。

何かができるようになって初めて、できる感覚がわかるのではなく、できる感じがするからこそ、できるようになる。近年の研究によれば、私たちが行為をするとき、どうやらこのような順序で物事が進んでいるらしい。

生命とは、予測する存在である、という観点から、脳の様々な機能を統合的に説明する「自由エネルギー原理」の提唱者である神経科学者のカール・フリストンらによれば、私たちの運動を可能にしているのは、運動ができたときの「筋感覚の予測」なのだという。

私たちがからだを動かすとき、脳の運動野から脊髄のニューロンを通って筋に信号が送られる。運動野からこのとき送られる信号は従来、筋にどういう力を発揮させるかを決める「運動指令」だと考えられてきた。ところがフリストンらは、これが予測信号だと提案したのだ。

私たちが運動しているとき、運動に先立って脳は、まず運動終了時の筋感覚を予測している。その後、予測と現在の筋の状態との差を縮めるように運動が生成していく。フリストンの自由エネルギー原理の考え方を解説する著書『脳の大統一理論』(乾敏郎・阪口豊著、岩波書店)によれば、運動野の働きを「感覚信号の予測」の一種ととらえるこの考え方はいま、神経科学のみならず心理学や精神医学などの分野にも大きな影響を与えているという。

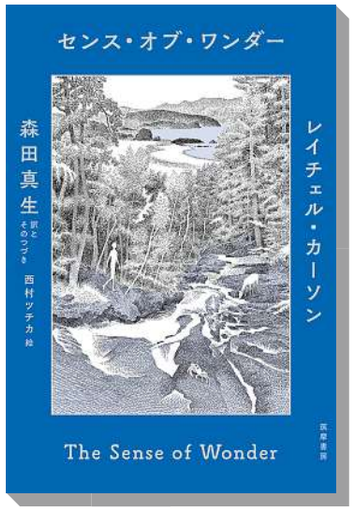
生き物である私たちは常に、動きながら何かを感じている。現存する様々な機械とは違い、生き物にとっては「動く」ことと「感じる」ことがいつも不可分なのである。企業という組織も、機械としてではなく生命のようなものとしてとらえるならば、効果的に「動く」前提として、動きを可能にする「感覚の予測」を共有することが重要なのだろう。

組織にとってヴィジョンの言語化は、まさにこの感覚を共有する手段だ。「こうなりたい」という「感じ(feeling)」を予測できて初めて、そうなっていくための動きが始まる。

昨年私は、『沈黙の春』の著者としても知られるレイチェル・カーソンの遺作『センス・オブ・ワンダー』の新訳を発表した。1歳から4歳に成長していく大甥のロジャーとともに、カーソンが米国メイン州の海辺や森を、驚きと不思議に心躍らせながら散策した日々の記録だ。時代に先駆けて農薬などの化学物質が地球環境に及ぼす影響に警鐘を鳴らし、世界各地における環境保護運動の高まりをもたらした『沈黙の春』と比べると、『センス・オブ・ワンダー』は行動を喚起する書というよりも、未来を想像する新しい感覚を呼び覚ます本だ。

カーソンが思い描いたのは、これから生まれてくるすべての子どもたちが「きてよかった」と思えるような世界だった。私は訳者としてこの本と向き合いながら、カーソンが表現しようとしたヴィジョンに感じ入っていた。

感じるだけでは世界は変わらないと言われるかもしれない。だが生命にとっては感じることこそが、あらゆる動きに先立っているのだ。だからこそ、どのような未来を心に描き、それをどこまで確かな感覚として分かち合えるかが、どんな未来がやってくるかを決定していくに違いないのだ。



発行：筑摩書房

略歴
京都で研究・執筆のかたわら、国内外で「数学の演奏会」などライブ活動を行っている。デビュー作『数学する身体』(新潮社)で第15回小林秀雄賞を受賞。他の著書に『計算する生命』(新潮社、第10回河合隼雄学芸賞)、『かずをはぐくむ』(福音館書店)など多数。訳書にレイチェル・カーソン『センス・オブ・ワンダー』(筑摩書房)がある